

(論文博士) (様式 8)

藤本桂子氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目

主論文：

Experiences of adolescent daughters in beginning to live with their mothers' cancer: A qualitative study

(母親のがんとともに生き始めた思春期の娘たちの体験：質的研究)

Clinical Nursing Research (in press)**Keiko Fujimoto, Kiyoko Kanda**

副論文：

初発乳がん患者が罹患に伴う情報を小学生の子どもに伝える決断のプロセス

日本がん看護学会誌 第31巻：66-75, 2017

藤本桂子、神田清子

論文の要旨及び判定理由

主論文

乳がん罹患のピークである年代の女性は、思春期の子どもの親である時期と重なることが多いが、思春期にある子どもは親子のコミュニケーションが難しいといわれている年代でもある。本研究は、母親のがんとともに生き始めた思春期の娘たちの体験を明らかにすることを目的に行われた。母親が乳がんと診断された時に中学生または高校生であった15～19歳の女性14名を対象に半構造的面接を行い、Krippendorffの内容分析の手法を用いて分析した結果、母親のがんと共に生き始めた思春期の娘たちの体験として、(1)動揺や不安から心を安定させるために試行錯誤を重ねる、(2)自分たちの学校生活や将来への影響を最小限にする、(3)周囲の協力と支援で前に進む、(4)母親を守りケアするために家族と共に歩む、の4カテゴリが形成された。看護師は、乳がんの母親と娘がともに生きるプロセスをアセスメントする際、「娘が、母親のがんに対する動揺や不安から身を守る方法をもっているか」「娘は、自分にとって大切な人との関係を維持できているか」などを尋ね、これら情報を早期に入手し、速やかに支援を開始することが重要であると示唆された。

副論文

小学生の子どもを養育する初発乳がん患者14名に対して面接を行い、M-GTAにて分析した結果、初発乳がん患者が告知を受けてから罹患に伴う情報を小学生の子どもに伝えることを決断するまでのプロセスを明らかにしている。

以上より、これまで明らかにされていなかった、母親が乳がんと診断された時期の思春期の娘の体験を明らかにし、看護介入への示唆を得た点において、保健学の発展に貢献する研究と認められ、博士(保健学)の学位に値するものと判定した。

審査委員

主査

群馬大学教授 (保健学研究科)
看護学講座

金泉 志保美



副査

群馬大学教授 (保健学研究科)
看護学講座

近藤 由香



副査

群馬大学教授 (保健学研究科)
看護学講座

岡 美智代



参考論文

- 1.
- 2.

（論文博士）（様式 8, 2頁目）

略 歴

最終学歴

平成25年3月22日 群馬大学大学院保健学研究科博士前期課程修了

研究歴

平成22年 4月1日 桐生大学医療保健学部看護学科助手
平成23年 4月1日 群馬大学大学院保健学研究科博士前期課程
平成25年 4月1日 群馬大学大学院保健学研究科助教
平成29年 4月1日 高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科講師

紹介者

群馬大学教授 大山 良雄 （保健学研究科看護学講座）

研究場所

群馬大学大学院保健学研究科看護学講座
高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科

専攻学術試験の結果の要旨

Krippendorffの内容分析について、質的研究の質の担保および真実性の確保について、および研究結果の臨床での活用について

試問し満足すべき解答を得た。

（令和5年3月27日）

Krippendorffの内容分析について

合・否

質的研究の質の担保および真実性の確保について

合・否

研究結果の臨床での活用について

合・否

群馬大学教授（保健学研究科）
看護学講座

金泉 志保美



群馬大学教授 (保健学研究科)
看護学講座

近藤 由香



群馬大学教授 (保健学研究科)
看護学講座

岡 美智代

